

国際協力Ⅲ

国際協力の実践

日時：平成23年10月8日（土） 13:00～15:00

講師：添田 亮（元青年海外協力隊）

概況



◎国際協力の実践

1. インドネシアでの活動

・1990年7月から1992年11月まで、主にインドネシア共和国東ヌサテンガラ州チモール島、東チモールの西側に位置するクパン Kupang で活動を行った。クパンは失業率30%、中等教育の就学率が国内平均の2分の1など、インドネシアの最貧地域といわれている。地質が悪く、雨季と乾季が存在する。地域の産業は農業、牧畜で、焼畑も行われている。

・クパンの林業試験場で地域の森林再生のための母樹調査やアグリフォレスト(森の中に畑を作る)の試験、土壌活性剤を利用した造林試験、スンバ島の鳥類調査等を行った。様々な支援が行われているが、最も必要な地域にまで行き届かないのが現状。活動期間の終わりに JICA インドネシア事務所長が現状を視察し、更なる支援を予定していたが、治安の悪化を理由に現在は撤退している。

2. 森林とは何か

・世界一大きな木はアメリカのセコイアである。では、世界一長生きの木はというと、スウェーデンのトウヒ(推定9500年)である。極相林の樹種は条件さえ整っていれば、寿命は無いといわれている。

・日本の古い人工林には、伐期 250 年の森林がある。計画的な林業の結果である。

・日本の森林面積は 50 年前と比べてほとんど変化がないが、古代(奈良～平安時代)、中世(戦国～江戸時代初期)、明治～太平洋戦争ごろに大きく森林面積が減少していたとみられる。また、森林自体も常に利用がされていたため、疎林も多くみられた。

・諏訪地域の砥川上流(砥沢)流域では、明治時代には養蚕が盛んに行われたことで、周囲の森林は燃料として伐採され、ほぼはげ山だったことが当時の絵地図から分かる。現在のような森林が広がるようになったのは、近年のことである。土地が以前どのように利用されてきたか、という土地の履歴は、将来的に土地をどのように利用するかを考える際に注意しなくてはならない。

・森林性の猛禽類が増加する一方で、草地性の猛禽類やチョウ、ノウサギなどが減少している。より多くの生物種を残そうと考えるならば、森林にして放置するだけでは守れない環境があることを理解しなくてはならない。